

1920年代「狂乱の時代」の登場人物たち

間瀬幸江

Mase Yukie 宮城学院女子大学教授

第10回

シュザンヌ・ヴァラドン —“ありのまま”を貫いた自由の画家

1865年、父親を知らない貧困層の生まれ。15歳で馬乗りの曲芸師としてサーカス団に入るが、落馬でキャリアを断念する。18歳で父親が誰かわからない子を産む。ルノワールやロートレックの多くの絵のモデルが、実はこの人である。エリック・サティはじめ名だたる芸術家たちを虜にする。44歳の時、20歳年下で息子の友人だったアンドレと恋仲になり、結婚する。自分たち2人をアダムとイヴになぞらえた裸体画を描き、男性器も遠慮なく描く。やがて画家として頭角を現し、ルノワールやドガに続く存在としてパリ・モンマルトルに君臨する。

シュザンヌ・ヴァラドン(1865–1938)。彼女はなぜ、かつての熱狂とともにではなく、再発見という文脈で語られるのだろう。ヴァラドンの忘却は、例えるなら、百年後の世界で歌手のマドンナやココ・シャネルの名を歴史家以外だれも思い出さないと同じようなものである。

まず、彼女が画家ユトリロの母であったことは大きい。誰もが愛玩する「古き良きパリ」への憧憬を今に伝えるあの画家の母としては、子育てをしないネグレクトの親とされる。そして、キキ、フジタ、カルダー、ヴァシリエフといった狂乱の時代の「若者文化」を担った画家たちより一世代上で、本拠地はモンパルナスではなく、印象派の余韻を残すモンマルトルであった。

さらに彼女の人生は、憐憫や哀惜によって“悲劇として物語化”されるには、あまりにも成功していた。1938年に彼女が亡くなったとき、ピカソ、プラック、ドランなどの巨匠たちがその死を悼んだ。晩年の佇まいはどこかガートルード・スタインを思わせる。「悲劇のヒロイン」にはほど遠い。

だが、忘却を決定づけたのは成功そのものだけではない。彼女は真に

大修館書店『英語教育』1月号掲載
転載禁止
シュザンヌ・ヴァラドン《自画像》1883年、
ユトリロ生年の作。

「自分の好きなように生きた」。しかも、それを女性が実現することが稀有だったがゆえに、彼女の死後、その人生を“物語”として引き取り、語り継ぐだけのことばを持つ自覺的な「味方」が出てこなかった。パリの美術館ポンピドゥー・センターが、2025年秋からの大規模改修を控えた最後の4か月という極めて重要な会期を彼女の回顧展に充てたのは、この理不尽な忘却に対する現代美術界からのささやかな詫び状に見える。

ヴァラドンは、既存の絵画文法の本質を独学によって掘みながらも、それに囚われることなく、心の眼とたたき上げの技術によって、人の心のありようを外見を通して捉えた。愛玩され消費されるための絵ではなく、人のため息や放心、日常の一瞬の心模様をそのまま描いた。家が裕福でなければ女性が美術学校に通えなかった時代に、裸体画という絵画の基本を、自分が裸婦モデルをしていた画家たちのアトリエ経験のなかで、持ち前の觀察眼によって身につけた。彼女の画風は、誰かに似ているようでいて、実は誰にも似ていない。その人生は、美術史上どころか人類史上においても稀有である。私はいっそこれを「ヴァラドニズム」と呼称したい。

本名はマリー=クレマンティーヌ・ヴァラドン。老齢で好色な男たちに知性で打ち勝った聖女 シュザンヌの名で最初に彼女を呼んだのは、恋人だったロートレックだとう。女性や貧困者を搾取する社会に對して、そこに取り込まれるような媚態ではなく、知性のダイナミズムによって立ち向かい、生き抜いたヴァラドンを語れるだけのことばを、私たちが真に持てるのは、まだ先だろうか。しかし少なくとも、私たちはもう、彼女のことを忘れてはならない。

◆参考文献

Flore Mongin, *Suzanne Valadon, peintre sans concession* (Documentaire), ARTE, 2025.

